

保育実習Ⅱの実習施設からの評価について

～令和3年の実習評価から～

菅原航平

【要旨】

大分県内では、平成22年度より保育士養成を行う3短期大学において保育所実習の評価票様式を統一して使用している。保育実習指導のミニマムスタンダード改訂などの変化を踏まえ、令和3年度より改訂した新たな実習評価票の使用を開始した。本報告では、改訂された実習評価票における実習施設からの評価の傾向を把握して実習評価票の妥当性を検討するとともに、評価の傾向から実習生や実習指導における課題を整理することを目的とする。分析の対象は研究協力の意思を示した学生168名分の保育実習Ⅱの評価票とした。結果より、態度では「社会性」や「探求心」、知識・技術では、「保育所の役割と機能の理解」、「保育士の役割と職業倫理」、「保育の記録・考察」などの評価が低くなっていた。評価の大きな偏りはなく評価票の改訂は適切であったと考えられ、評価の結果においては他の養成校での報告と同様の傾向がみられた。今回の結果を今後の指導の参考にするとともに、データを蓄積してさらに詳細な分析を行っていききたい。

1. はじめに

保育士養成校における保育実習の評価は、評価をもとに学生自身の学習状況を把握して次の自己課題を設定することなどを目的として行われ、実習施設による評価と養成校による評価を合わせて最終的な実習評価とする。実習施設は、各養成校が指定する実習評価票の様式に従って学生の実習について評価を行い、養成校に伝える。しかしながら、国から指定された共通の様式などは存在せず、養成校により実習評価票の様式や評価基準が少しずつ異なり、実習施設では実習の都度各養成校の様式や評価基準に合わせて評価を行うことが負担になる場合もある。このような課題に対応するために大分県内では、平成22年度より保育士養成を行う別府溝部学園短期大学、東九州短期大学、別府大学短期大学部

において保育所実習の評価票の様式を統一して保育所実習において使用している。¹⁾

大分県保育所実習統一評価票の作成から一定期間が経過して、その間に「保育実習指導のミニマムスタンダード」²⁾の改訂や保育士養成課程の改正（平成31年）といった保育士養成を取り巻く環境の変化があった。このような変化を踏まえ、現在の保育士養成や実習の実態に即した評価票とするために令和2年度より引き続き3養成校で協同して実習評価票の改訂を行い、令和3年度より改訂した新たな実習評価票の使用を開始した。今回の改訂では新たに、評価に関する解説書を作成し、それぞれの評価項目について評価に必要な解説を付した。

本報告では、改訂された実習評価票における実習施設からの評価の傾向を把握して実習評価

票の妥当性を検討するとともに、評価の傾向から実習生や実習指導における課題を整理することを目的とする。

なお、大分県統一保育実習評価票の改訂については、保育士養成協議会九州ブロック協議会のプロジェクト研究（研究代表者：東九州短期大学 江玉睦美）として一部助成を受け実施している。

2. 方法

(1) 調査期間・対象者

令和3年8月から12月にかけて別府大学短期大学部2年次の保育士資格取得希望者を対象として行われた、「保育実習Ⅱ」についての実習施設から提出された実習評価票を分析対象とした。分析対象者は168名であった。

(2) 大分県統一実習（保育実習Ⅱ）評価票

実習評価票の評価項目は、態度に関する4項目（意欲・積極性、社会性、責任感、探求心）と知識・技術に関する6項目（保育所の役割と機能の理解、子どもの理解・援助、保育内容・保育環境の理解と取り組み、保育の計画・実践、保育の記録・考察、保育士の役割と職業倫理）で構成されている。実習施設に対して、それぞれの項目について実習評価票解説書を参考に実習生として、A：優れている、B：適切である、C：努力を要する、D：多くの努力を要する（不可）の4段階での評価を行うことを求めた。また、最終的な総合評価として同じく4段階での評価を求めた。

(3) 倫理的配慮

実習関係資料の研究・報告への使用について、書面にて同意の意思を示した学生の資料のみを

分析対象として、同意の得られなかった学生の資料については分析対象から除外した。

3. 結果

(1) 態度

表1には、態度に関する4項目についての評価の割合を示した。「意欲・積極性」、「責任感」に関しては、「優れている」が51.5%、53.4%と半数以上の学生が「優れている」と評価されていた。半数以上の学生が「優れている」と評価されていた項目は評価全体でこの2項目のみであった。「社会性」、「探求心」では「優れている」と評価された学生は全体の35.6%、38.3%いた。

「努力を要する」と評価された学生の評価根拠となる記載を確認すると、「意欲・積極性」では、「子供から来てもらうのを待っていることが多かった。」、「本当に最低限のことは自分から聞いてくるがそうでないと立っているだけのことは多かった」などがあった。「社会性」では、「子どもに対する言葉遣いが気になることもあった」、「朝の挨拶からあまり元気がなく、担当している保育士以外の他の先生への挨拶など行き届いていないように思った。」などがあった。「責任感」では、「二日目に連絡もなく遅刻してきていた。また提出物の確認不足もあった」、「自分が関わったり、見ていたトラブルなどについて、最後まで責任を持って解決させるか、できなければ他の保育士に尋ねるなどの対応をしてほしかった。」などがあった。「探求心」では、「ピアノや絵本の機会を提供、相談したが、言われていないとのことでしなかった」、「毎日その日の保育について振り返りを行ったが質問も少なく、2、3日行くと聞きたいことも、わ

表1 態度についての評価の割合

	意欲・積極性	社会性	責任感	探求心
優れている	51.5%	35.6%	53.4%	38.3%
適切である	40.5%	59.5%	39.9%	52.5%
努力を要する	8.0%	4.9%	6.7%	9.3%

表2 知識・技術についての評価の割合

	保育所の役割 と機能の理解	子どもの 理解・援助	保育内容・保育環境 の理解と取り組み	保育の計画・ 実践	保育の記録・ 考察	保育士の役割 と職業倫理
優れている	17.9%	41.7%	28.0%	38.0%	38.4%	16.0%
適切である	74.7%	52.1%	67.1%	55.8%	49.4%	79.6%
努力を要する	7.4%	6.1%	4.9%	6.1%	12.2%	4.3%

からないこともありませんと探求心が少ないように思った」などがあった。

(2) 知識・技術

表2には知識・技術に関する6項目についての評価の割合を示した。「保育所の役割と機能の理解」、「保育士の役割と職業倫理」については、「優れている」と評価された者が全体の2割を下回っていた。また、「保育の記録・考察」については、「優れている」と評価されている学生は38.4%であり、決して少ないわけではないが、「努力を要する」と評価されていた学生は全体の12.2%とすべての項目の中で最も高い割合となっていた。「優れている」の割合が最も高いのは、「子どもの理解・援助」の項目であった。

「努力を要する」と評価された学生の評価根拠となる記載では、「保育所の役割と機能の理解」では、「自分から気づくことや疑問に感じることは乏しかった。」「子供の背景に保護者の存在を意識して家庭とどのようにつながりや連携を図っていくなどの視点が持てると良かった」などがあった。「保育の時に特定の子供ばかりに関わることが多く、言葉が少ない子供達に対する言葉かけや援助が少ない」、「個別の援助や環境構成など見えない部分の援助に着目できると良かったと思う」などがあった。「保育内容・保育環境の理解と取り組み」では、「どうしてその活動をするのかその環境構成なのか気づくことができれば良いと思います」、「子供の姿に対して保育士がなぜそのような関わりや言葉かけをしていたかなど保育士の意図を汲んだり気づいたりできることも必要」などがあった。「保育の計画・実践」では、「設定保育での

指導案では予想される子どもの姿をあまり書いておらず実際戸惑っている場面もあったので活動だけに限らず、様々な場面での子どもの姿を予想し環境設定を事前準備に備えてほしいと思います」、「実習期間を通して保育担当者と振り返りや打ち合わせの時間持ったが指導案や保育の準備の大切さの理解は難しかった。」などがあった。「保育の記録・考察」では、「日誌では反省点や困りに対する記載、振り返りが少なかったので具体的に記録を取ると次につながっていく」「気づきや保育者の配慮の部分で記入が少ないことが少し気になる部分であった。」などがあった。「保育士の役割と職業倫理」では、「子どもと関わることにとらわれていたのか保育士の役割としての片付け掃除などに対して少し消極的に見られた」、「保護者との対応など保育者が行う内容についての関心は見られなかった」などであった。

(3) 総合評価

表3には総合評価の割合について示した。「優れている」が32.7%、「努力を要する」が3.0%となっていた。

表3 総合評価の割合

	総合評価
優れている	32.7%
適切である	64.3%
努力を要する	3.0%

4. 考察

(1) 評価の傾向について

態度の評価では、「社会性」や「探求心」の項目が「優れている」との評価の割合が低くなっ

ていた。他の報告では、川俣ら(2012)³⁾は、「意欲・積極性」、「探求心」の項目が低く評価された割合が高くなっていた。八田ら(2021)⁴⁾の報告では、態度の評価には項目間の大きな差は認められなかったが「探求心」の項目が最も低くなっていた。このように、どの養成校においても現場の求める探求心の水準に達していない学生が多い傾向にあると考えられる。

知識技術についての評価では、保育所の役割と機能の理解や保育士の役割と職業倫理についての項目が「優れている」の割合が低く、「保育の記録・考察」の項目で努力を要するが多くなっていた。他の報告をみると、川俣ら(2012)³⁾の報告では、「保育技術の展開」、「指導計画の立案と実施」、「記録」、「保護者とのかかわり」が低く評価された割合が高くなっていた。八田ら(2021)⁴⁾の報告では、「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」、「職業倫理」などの項目の評価が低く、「子どもへの対応」の項目の評価が高くなっていた。岡田(2020)⁵⁾の報告では、「指導計画の作成、実践、観察、記録、評価」についての項目がC、Dと評価された学生が全体の35～51%で最も割合が高く、次いで「保育士の業務と職業倫理及び自己課題の明確化」の項目が23～41%と多くなっていた。「観察に基づく保育理解」は15～32%とC、D評価を受けた学生の割合は低かった。知識・技術に関する項目についても養成校に共通する傾向がみられ、計画や記録など文章化して示す必要があるものや保護者との関わりや倫理など直接の経験だけではなく、保育者の観察や質問を通して学ぶ必要がある項目については、現場の求める水準に学生が達していないことが多いようである。逆に、子どもへの関わりや子ども理解など子どもとの直接的な関わりについては比較的良好な評価をえる傾向があった。本学でも同様の傾向があったと考えられる。

(2) 評価票の改訂について

「意欲・積極性」、「責任感」については、半数以上の学生が「優れている」と評価されており、また「保育の記録・考察」については「努力を要する」という評価が1割を超えおり、この傾向が続くようであれば、他の基準と同等の水準かつより適切な評価基準とするために、評価基準の見直し(難易度を上げるまたは下げる)を検討することも必要かもしれない。しかしながら、大きく評価が偏り適切に機能していないと考えられる評価項目はなく、今年度のデータのみから判断すると令和3年度の評価票の改訂は、おおむね適切であったと考えられる。

ただし、評価票変更初年度で、コロナ禍という特別な状況下での実習でもあったため、この結果が例年の傾向を反映しているのかについては注意をして解釈を行う必要があると考える。

(3) まとめ

今回「努力を要する」と学生が評価された内容や「優れている」という評価が少なかった項目、「努力を要する」と評価された根拠については、今後の実習指導の参考としていきたい。さらに、今回は紙面の都合で優れていると評価された点については扱うことができなかったが、合わせて指導の参考としていきたい。

また今後は、引き続き評価票の妥当性を検討するため、同一学生の「保育実習Ⅰ(保育所)」と「保育実習Ⅱ」の経時変化や、年度による傾向の変化などについてもデータを蓄積して検討しながら、実習指導の内容・方法の改善に努めていきたい。くわえて、今回は特徴的な項目のみ記述の検討を行ったが、評価に関する記述全般についてテキストマイニングを行っている研究⁶⁾もあり、評価票の記述や訪問指導担当者の記録など実習指導に関する記述に関しての詳細な分析も今後行っていきたい。

5. 引用参考文献

- 1) 相浦雅子・高濱正文・小野貴美子・谷川友美、九州統一評価票の実現に向けての取り組み、別府大学短期大学部紀要、2013、32号、125-131
- 2) 一般社団法人全国保育士養成協議会（編）、保育実習指導のミニマムスタンダード、2018、中央法規出版
- 3) 川俣沙織・那須信樹・平田美紀・山田朋子・森田真紀子、保育所実習における「統一評価票」の活用、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、2012、第44号、35-44
- 4) 八田清果・奥恵・浅香勉・音田忠男、保育者養成校の学生の傾向・課題から検討する実習指導の在り方について—A保育者養成校における保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲの実習先評価の経年比較から—、小池学園研究紀要、2021、19号、61-70
- 5) 岡田真智子、保育者養成校における保育実習指導を考える：2015年度～2018年度の保育実習評価及び自己評価、愛知学泉大学紀要、2020、2巻2号、157-164
- 6) 阿部眞弓・高向山・海野展由、保育実習での評価の傾向に関する研究：テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み、常葉大学健康プロデュース学部雑誌、2020、14（1）、63-69